

## イラン、しつけのきほん

岩崎葉子

イラン人は概して、たいへんな子ども好きである。通行人がすれちがいがまに知らない子どものほつたをつまんんだり、頭をなでたりするのは日常茶飯事。危険な道路で交通渋滞を引き起こしつつサッカーに興じる男子や、店先で泣き叫んで母親にお菓子をおねだる駄々っ子にも、人々の視線はすこぶる肯定的だ。

スキーのインストラクターは子どもが転ぶたびに「大丈夫かっ」と助け起こし、むぎゅうと抱きしめる。親は公園で遊ばせている子どもに「お腹はすいていないか」とのべつまくなしに食べ物を与える。いつぞやは、目に入れても痛くない二歳ほどの愛娘をレストランのテーブルに(靴をはいたまま)のせて踊らせ、「なんて上手にダンスができるんだい」と目を細めている父親を目撃して呆れたが、さらにそれをやんやの喝采で激賞している周りの客の反応にも驚いた。

かようにイラン人の子ども好きは、我が子が親の財布は無尽蔵と思ひ込んで、とんでもなく肥満児になったり、「ボクって世界一」と勘違いしたりする諸々の弊害をもとめせず、きわめて確固としているのである。

子どもが騒いだりふざけたりするのを厳しく戒め、とりわけ公共の場では子どもであっても節制と我慢が美德とされる日本のしつけの「正統」からすると、かなり問題視されそうな場面が目白押しだ。「子どものやることじゃないか」とおおら

かなイラン人の親にわがまま放題に育てられ、いっこうに社会性が身についていない(かのように見える)子どもたちを眺め、おおかたの日本人は「べたべたに甘い子育て」と批判的である。

しかしながら、長いことイラン人の家庭を観察していると、じつは、イラン人のしつけが甘いのではなく、しつけのポイントが我が国とは違うところにあるのだと分かってくる。

ある知り合いの家に招かれた時、ようやく一人でトイレに行くようになったかというくらいのお子ちゃんが、お盆にお茶をのせてよろよろと運んできた。「どうぞ、召し上がって」とかわいらしい接待。台所に立つて忙しい大人たちに代わり、彼女が私につきっきりで果物やお菓子を勧めている。

また某企業の重役の私邸にお呼ばれた際は、私と重役氏との仕事上の会話を、下座に控える(おそらくその会話内容にはまったく興味がないと思われる)大学生の息子さんがじっと聞きながら、相づちを打ったり、せつせとお茶をいれかえたりしていた。

私が外国人だから特別というわけではない。イラン人同士でも、こんなふうに自宅を訪れた客を、その家の子どもが親になりかわって(あるいは親と一緒に)かいかいしく接待する光景はじつによく目にする。およそ話題も関心も共有していないと思われのおじいさんの客に、小学生の男の子がつきしたが、椅子に座らせお茶を勧め、自分の手持ちのおもちやを陳列したりして間をもたせようと頑張っている様子は、なんともほほえましい。ほんとうは彼も、さつさと友達と外へ遊びに行ったり、部屋でお気に入りの歌手のビデオクリップを観たりしたいのは明らかだが、彼がひ

とどりの「任務」を果たすまでは親はそれを許さないのである。子どもにとっては、自分より半世紀は長く生きていようかという大人に愛想を振りまき、お相手をするのはかなり難度の高い技であると思われるが、イラン人の子どもたちはじつに健気にこれを遂行している。

かかるイランのしつけのポイントは、すなわちお客人をけつしてないがしろにしてはならない、という点にある。日本の子どもたちはこの点大いに甘やかされていて、玄関先に親の知人が現れても「あんた、誰」という顔でろくに挨拶もせず、すみやかに自室にこもってゲームに没頭している。どうせお互いに話も合わないのだから、と親もあえて子どもを同席させたりはしない。しかしイランでこれをやればたいへんな「失礼」にあたるのである。

イラン人の子どもたちは、周りの大人からかわいがられ多々のおめこぼしを受けながらも、一方でこういう険しい試練にも耐えている。日本のしつけは「顔のない不特定多数」の利益に反さないことが必須課題だが、イランのしつけは「いま眼前にいる人」をいかに手ばかりなく響応(きょうおう)するかという点に重きを置いている。自分とはこれといった共通項のない他人を相手に、まがりなりにも一定時間ごやかに会話を成立させるためにはそれなりの高度な社会性が求められるが、これはイラン人の最も得意とするところである。イラン人のこの類いまれな社会性の源は、幼児であっても免れることのできない日々のコミュニケーション能力の鍛錬にあるのだ。

これはなかなか、厳しいしつけではないか。

いわさき ようこ/アジア経済研究所 在テヘラン海外調査員

専門 イラン経済制度史。  
フィールドワークに史料・文献調査を加味し、イラン独自の経済慣行やシステムを分析している。